

芸術視光学の理論と実践⑩

主題としての「永遠」

—「光のカリスマ」最果タヒの誕生—

平居 謙

要 旨

最果タヒは最新詩集『愛の縫い目はここ』において「光のカリスマ」とでも呼ぶべき、特殊な詩人の立場を築くに至った。しかしその位置は最初から確立されていたわけではなかった。「光」のイメージは、第2詩集『空が分裂する』中の詩句に初めて数多く現れたが、その時点では「私」とは直接関わることなく「永遠」という言葉の周縁を漂っているかのようであった。また、「死」も多数現れていたがまだそれは、「死後」の世界へと踏み込んだものではなかった。この実験的な形而上性はリトルモアシリーズ第1弾『死んでしまう系のぼくらに』において一旦姿を潜ませる。しかし続く『夜空はいつでも最高密度の青色だ』では『愛の縫い目はここ』への序章としての重要な表現が現れ、この最新詩集において、後光が射すような立場から死と永遠とについて語り掛ける詩人、すなわち「光のカリスマ」が誕生したのであった。

〔キーワード〕 文学 宗教 永遠

はじめに

論者は最果タヒ第1詩集『グッドモーニング』に関する論¹⁾の中で〈「もっと不毛な街」とはどこか。この「場所」を追求してゆくことが、最果の現時点における文学的課題そのものであって、新しい作品群の中でその形象化がなされてゆくだろうと論者は見る。〉と書いた。これは第4詩集『夜空はいつでも最高密度の青色だ』の次のような詩句に対しての謂いであった。

東京と恋愛が、ドミノみたいにばたばたと倒れて、その痕跡／に人生と名付ける方法。もっとましな人生を、手に入れるに／は、もっと不毛な街に旅立つ必要があるんだろう。

（「花園」部分）

当該論文の中では、第1詩集に遡って最果タヒの「不毛な街」の根源について考察した。それに対して、本稿では第4詩集の延長線上に成された最新の第5詩集『愛の縫い目はここ』の中に「不毛な街」の形象を探ろうとした。そして意外な形でそれが成し遂げられようとしていることに気付いた。それは「死後の世界」への踏み込みである。旅立つべき「不毛な街」が「死後の世界」であるというのは、非常に納得がゆく。それは古来文学者の最大の課題の1つであるからだ。しかし彼女は単純に「死後の世界」を描くだけでなく、求めるべき「永遠」として、読者の心に訴えながら親しみを以てこれを表現していった。その特徴としては第2詩集『空が分裂する』に頻繁に現れ、その後姿を潜めていた「光」のイメージを復活させる形で用いたことを挙げることができる。すなわち、「死後」から始まる「永遠」の世界を読者に語り掛ける語り手に後光が射すかのように、或いは大観衆に語り掛ける舞台上のミュージシャンを光が照らすような構図である。これによって彼女は、難解でもあり楽しくない話題であることから、触れることなく過ごし勝ちな「死後の世界」を親しみを込めて語り得

る「光のカリスマ」となり得たのだ。

本稿では『グッドモーニング』『空が分裂する』『死んでしまう系のぼくらに』『夜空はいつでも最高密度の青色だ』『愛の縫い目はここ』の既刊5冊の詩集に関して「永遠」という言葉を巡る表現を辿る。このことは上記「光のカリスマ」の成立過程を精査することに他ならないと言える。

1 第1詩集『グッドモーニング』と「永遠」

最果タヒはこの詩集『グッドモーニング』で若手詩人の登龍門とも言うべき中原中也賞を受賞。それをきっかけとして現代詩の領域にとどまらない活躍を見せるようになる。だが後年の作品と比して、この詩集は非常に内省的な内容を持つという特徴がある。この詩集に関して筆者は前掲論文で詳細に論じた。このため本稿で詳しく繰り返すことは避けるが、以下のような作品がこの詩集の特長を象徴的に現しているといえる。

- ・ ゆれる／地震がおきてもあの銭湯に行きたい／毎日部屋の中で雨が降る、わたしの体はつねに泥だらけになる、子供達の首をつかまえて、／洗面器に入れていく、つれていった銭湯は温泉ではないけれどとても暖かい
(「再会しましょう」部分 P82)
- ・ 降っている／／部屋のなかの腐った雨は、遠い／昔に降ったものだろうけれど、たぶんわた／しが体温を得、泣く、時のにおいでもある／のだろうと、ひとりで、部屋が夜に腐り、／再生する中で目にする／絨毯に巻き取られ／るわたしの体をはやく溶かして……／／し／／てください
(「術後」部分 P43)

部屋の中に降る雨というのは、「雨漏りがする」といった物理的な問題ではない。孤独に閉じ込められた心の中に、鬱屈した雨が吹き込むのである。この詩集は「部屋に吹き込む雨に晒される私」という思春期の少女の有り様を実にうまく表現していると言える。この詩集は彼女が大学生の時に生まれ、「思春期」というには季節外れである。しかしそれは当然のことで、一段知的にも感性的にも成長した大学生として過去の自分自身を見つめなおすという冷静さがある時に初めて、思春期的なものは作品化されるのであり、真ただ中で書けるということも却ってないからである。

このような第1詩集『グッドモーニング』であるが、この詩集中には〈永遠〉は2例現れるのみである。それは、漢字ではなく平仮名で示されている。

わたしは／傘でしたか／／あめふり、始まった瞬間に窓から捨てられてしまいました。そこが部屋であるから、かれらはかわらない日々を過ごしている。傘がないからえいえんに迎えない。／／あめはえいえんに止まず、そうね、火事もだから起きない。かれらはけっして外を見ない。暖炉があたたかい。草花をそだてていて。きちんと水をやっている。わたしの眼がとてもいたいです。骨が折れてしまった。
(「死なない」冒頭部 P70 下線は論者による 以下同様)

本稿では最果タヒという一人の詩人を貫く「永遠」というキーワードを通して各詩集を見直すということを始めているわけだが、そういう形でアプローチしてもやはり「部屋」「雨」という世界に直結する。ただしここでは「永遠」という形ではなく「えいえん」と平仮名で表記される。この引用の部分に限定しても他にも「あめ」「かれら」「けっして」「あたたかい」「いたい」など、比較的簡単な語も平仮名で表記しているから、「えいえん」だけが特別という訳では必ずしもない。けれども今挙げた言葉と「えいえん」とは、有している観念レベルにおいて相違がある。「永遠」が「えいえん」と表記されることに、「雨」「彼ら」「決して」「暖かい」が平仮名で書かれるのとは少し異なる印象を

持つのは自然だろう。

もっとも時系列的に最果タヒの詩集を読み進める者にとってはそれは見過ごされる可能性が高い。というのもその読者たちはその時点で、最果にとっての「永遠」という語・観念の重要性を意識していないからである。気づいたとしても〈一般的には「永遠」と漢字表記されることの方が多いだろう言葉が平仮名で表記されている〉という事実に対してであって恐らくそれ以上踏み込む根拠が見当たらないのである。

しかし、『グッドモーニング』以降の詩集中には「永遠」という語が頻出することを念頭に置いて考える時、平仮名で表記されているという事実が意味を持ち始める。例えば次のように考えることができる。「最果は〈永遠〉と主題を意識したものの、まだ正面から対峙するということではなく、その意識が「えいえん」という形で、いわば意味を排除する「音だけ」の形で示されたのではないかと。もっとも一般には、平仮名で表記されることの効果は全く逆の意味合いを持つという説明も可能であるため²⁾短絡させることは危険であろう。しかし、この解釈を後押しする事実としては次のようなことがある。

この詩集に続く『空が分裂する』『死んでしまう系のぼくらに』『夜空はいつでも最高密度の青色だ』『愛の縫い目はここ』にもそれぞれ「永遠」が現れること、さらに言えばこれらの詩集にはそれぞれ6から10の「永遠」（いくらかは「えいえん」も含む）が現れること。すなわち、「永遠」ということに関しては第1詩集『グッドモーニング』はまさに序章に過ぎなかったという可能性が大きいという事実である。以下、本稿ではこの仮説に従って、彼女の続く4つの詩集における「永遠」の實質に踏み込んでゆく。

2 『空が分裂する』と「永遠」

第2詩集『空が分裂する』は第1詩集『グッドモーニング』と比して真逆ともいうべき開放感に満ち溢れている。『グッドモーニング』が〈部屋に籠〉るというイメージだとすれば、『空が分裂する』は炸裂し宇宙に飛び出すイメージである。同じように「部屋」が舞台でも、前者の場合は先述のように「雨が降り込む」奇妙な孤独の部屋であった。それに対してこの詩集の示す「部屋」はたとえば次のようなものである。

ぼくらの部屋は UFO で、宇宙の外に避難ができた。感情や死や、／物理学の届かないものはいつだって、宇宙の外でせせらいでいるは／ずだ。ね、地球は終わっても、どこかにまた地球はあるよとあの子／たちは言う。／「200 個はあるよ」 （「200 個の地球と部屋と静かで」冒頭部 文庫版 P 52）

上の引用はさらにもう1つの重要な事実を示唆している。『グッドモーニング』の場合、「部屋」には誰も居ることはなく殆ど「私」だけの世界であったのに対して、この詩集では「ぼくらの部屋」³⁾であるということだ。

「永遠」に関しては、この詩集には9例の「永遠」（タイトルに見られるものをカウントすれば10例）が現れている（表1参照）。特に目を引くのは「永遠」というタイトルを冠した作品がこの中には含まれていることだ。しかし作品を読み進めると「永遠」について直視し高い形而上性を有しているかもしれないという予想とは裏腹に、思春期特有の「殺人も、恋も、すべて空と呼べばいい」と言った具合の、「世界に対するあいまいな定義」⁴⁾の表明に留まっている。

その大半が「永遠に」という形容語として現れてきているのであり、これはいわば「ずっと」「気が遠くなるほどの長い時間」を極端にデフォルメした表現に他ならない。日常会話の中でも半ば冗談

めかして時に用いられる — 例えば「これは永遠の謎だ」といった — ように、それほどには深い意味性を湛えているとは言い難い。

しかし、本稿「はじめに」で述べたように、現時点での到達点である『愛の縫い目はここ』ではっきりと姿を現している「永遠の構図」を意識するとき、「光輝く」イメージと「死」のイメージとが「永遠」ということばに纏わりつくかのように既に姿をみせていることは特筆に値する。また、「永遠」を巡って単独で「死」「光」のイメージが現れているものはそれ以上に多い（本稿末尾表1参照）。

- ・あの日、どうやっても死なない気がしてい／た。太陽の光がある限りは永続的にそこに／ある気がしていた。あの頬も、町も、等間／隔で並んでいる街灯も、車輪が、こすれる／音も。夜に一瞬途切れるだけで、すぐに光／のように未来へ永遠に、のびていくのだと／思っていた。

（「器械」部分P12）

- ・人類が発生してからい／ままで私がすべてを生きてきたわけでは／ないということが、たとえばこれから死／んでも人類が生きつづけるということが、／私以外のみんなが人類の一こまとしてす／てきにえいえんであることが、ぴかぴか／と光って見えていました。（「放火犯」部分P24）
- ・春が来て、溶けた山やビルが、海に混ざって、まただれか生き物を作るんだろう。かわ／いそうだ。そんなことをしている間はいつまでたっても、ぼくらは不死身になれない、／自殺とか絶望とかの話題に事欠かない。死んだやつは生きてるやつに永遠に勝てない／のに、生まれてくるからだれか死ぬんだ。

（「50億」部分p142）

第5詩集『愛の縫い目はここ』においては「永遠」は「死後」の生として描かれていた。しかし、この『空が分裂する』ではまだ、「死後の生」を断言仕切る段階には達していないことがわかる。「永遠」を希求しながらも、「死なない気」でしかなく、つまりは不死の「匂い」に憧れるに過ぎないともいえるのである（「器械」）。また、「生き続ける」のは「私が死んだあとの人類」であり、私自身は死にゆくのだ（「放火犯」）。「50億」においては、「永遠」に憧れながらも「僕らは不死身になれない」と、「死後の生」とは真逆の方向に結論を断定する。

この詩集は少年漫画雑誌「少年マガジン」にイラスト・漫画とセットで連載された作品を集めたものである。詩という枠を超えた読者、しかも年少の読者に届けるためにさまざまに散りばめられた宇宙的大舞台。そういうスケールの大きさが、多くの「永遠」という語彙を引き出したと考えることができる。但し「永遠」の実態に立ち入った表現を特に見出しえないことに関しては、既に述べた通りである。

3 『死んでしまう系のぼくらに』における「永遠」

第3詩集『死んでしまう系のぼくらに』には7例の「永遠」を認めることができる。この詩集の中では「永遠」はさらに「死」との繋がりが強くなってゆく。タイトルに「死」を冠した詩集に含まれているだけあって「死」に関する言辭が多く出現するのは当然としても、大半の「永遠」が「死」と関わっているのは非常に興味深い。次に引用する「恋文」という詩の中にも沢山の「死」が2つの永遠（「えいえん」と「永遠」）に絡みついて引き出される。

恋文（全文）

死がわくとき、その頭上のあめつぶに、しろいカササギ／が一羽とまること、てんという足音がちいさく響くこと／に、あまりにも騒がしい葬儀の中で、人はいつまでも気／づけずにいる。死の周囲はいつでもうるさく、喧噪。粗／い粒子の会話がゆきかい、しんだひとに近いひとほど、

／口をつぐむ。えいえんの沈黙を中央にして。／愛を、と、言えない。／夢を、と、言えない。
 ／遠いところで、蛍がまた、光って、人を喜ばしているね。／温泉街、かもしれないね。／わた
 したちはだれも、このことについて語るすべをしら／ずに、いつかやってくる死にまぎれて、眠
 る。あい／されたいと言うまえに、生きたかったと、生きていてほ／しいと、きみの頬につげた
 い。わたしはきみしかしら／ない。きみの息を、きみの脈を、永遠につないでいきたく／いと、無
 為に願ったこと。おそろしいね。深い欲だ。い／つかかならず裏切られるのに、わたしはきみが
 死ぬこと、／永遠にゆるせない。(「恋文」全文 p24)

表1 「最果タヒ既刊5詩集中に現れる「永遠」を巡る表現と「死」「光」の要素の有無」一覧

各詩集の中に現れる「永遠」を巡る表現	死	光
『グッドモーニング』 傘がないからえいえんに迎えはない。あめはえいえんに止まず、そうね、火事もだから起きない (「死なない」冒頭部 P70)		
『空が分裂する』 ① あの頬も、町も、等間隔で並んでいる街灯も、車輪が、こすれる音も。夜に一瞬途切れるだけで、 すぐに光のように未来へ永遠に、のびていくのだと思っていた。(「器械」部分 P 12) ② たとえばこれから死んでも人類が生きつづけるということが、私以外のみんなが人類の一こまと してすてきにえいえんであることが、 <u>ぴかぴかと光って</u> 見えていました。(「放火犯」部分 P24) ③ 永遠 (作品タイトル) ④ あったことのない人を、みんなともだちだと思いたい あったことのないまましんでくれたらと もだちとしていいともだちとして永遠に思いこめるに違いない (「へらない」部分 P40) ⑤ たとえ、死ぬまでが何十年で、この火が光の速度のように一瞬、でよぎっていったとしても、ほ くらはそれを永遠に繰り返すことは出来なかった。(「キッチンブレイク」部分 p103) ⑥ 森のどまんなか、真っ赤なそれ、つくつくなりながら、きみのことを永遠にうらまない。静かな 森、ひとつだけの音。(「6 個目の心臓」部分 111p) ⑦ <u>光だけが残り</u> 、だから見ることは終わらなかった、終わらないまま隕石と、氷河期と、生命のこ おりづけを直視し、このまま溶けなければ、だれも生まれなければ、ほくらは氷の中で永遠に残 り続けることができるだろうと、命の滅びを願っていた。(「天国と、とてつもない暇」部分 p125) ⑧ だれもない、ことはない、だれもがいる、はずなのに、だれもが、こおりづけで死んでしまっ ていた。ほくらはだから永遠に <u>死をおびえる</u> ことはない。(同右) ⑨ そのうちぴたりと立ち止まり、 <u>ぴかりと光るようになる</u> 、もう天文学のゆるやか軌道だけを、 たどるようになってしまうのだ。それは永遠になるということだろうか、かれらはほくらを見下 して誇らしい気持ちになるのだろうか、(「冬の星の木の実」部分 p136) ⑩ <u>死んだやつは生きてるやつに永遠に勝てないのに</u> 、生まれてくるからだれか <u>死ぬんだ</u> 。(「50 億」部分 p142)	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
『死んでしまう系のほくらに』 ① わたしがしんでも、わたしが目の前に永遠にあらわれなくても、愛してほしかった。(「夢やうつ つ」部分 p8) ② 永遠でないのに、臆病さが一瞬を永遠にしまっている。(「絆未満の関係性について」部分 P 18) ③ 粗い粒子の会話がゆきかい、 <u>しんだひと</u> に近しいひとほど、口をつぐむ。えいえんの沈黙を中央 にして。(「恋文」部分 p24) ④ きみの息を、きみの脈を、永遠につないでいきたく、無為に願ったこと。おそろしいね。深い 欲だ。(同上) ⑤ いつかならず裏切られるのに、わたしはきみが <u>死ぬこと</u> 、永遠にゆるせない。(同上) ⑥ なんて過去の保存を私たちがしなきゃいけないのか、なんで未来のために私たちががんばらな きゃいけないのか、わからない。永遠に今でいいよ。もう誰も生まれなくていいし、だからもう 誰も、 <u>死ななくていい</u> 。(「2013 年生まれ」部分 p40) ⑦ 緑色の山の中で青い湖がある、それは天国よりも美しい景色だけれど、きっとこの人は愛する人 に、きみだけに教えるのだろう。だからわたしはこの景色を永遠に、知ることができないでそ のまま寿命で死んでしまう。(「LOVE and PEACE」部分 p55) ⑧ <u>死んだ人</u> の音楽が、ほくをころす。かれらがほくを愛することなど、永遠にないのだというこ が、ほくをわずかに生かしている。(「レコードの詩」後半 p85)	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

<p>『夜空はいつでも最高密度の青色だ』</p> <p>① 知らない音楽をただ聴きたかった。もう永遠に、次は聴けない音楽と、すれちがいたい。(「朝」部分 p8)</p> <p>② 書店で永遠にされた言葉は、ほくのなかで循環して、いつのまにか一瞬で、もろく、古いものになっていた。きみはきみの涙がちゃんと腐ることを知っているのか。(「聖者のとなりにはいつも狂者がいる」部分 p42)</p> <p>③ 殺している。きみがしんでいても生きていても私は知りようがない。永遠に。殺しているんだよ。(「夏」部分 P40)</p> <p>④ 殺している。きみがしんでいても生きていても私は知らない。知ることがない。はじめから。そして永遠に、私にとってきみは死体だ。(同)</p> <p>⑤ きみは海を見ていた。静けさが唯一ひとをまともに見せるなら、夕日の時間がずっとずっと続いてほしい。 きみの命も、永遠であってほしい。(「貝殻の詩」後半 p65)</p> <p>⑥ ストレス、精神論が楽にするものなんて、どうせただの感情で、私はもっときみといたい。それが解決することなんてきつと永遠にないだろう。きみが好き。花見にいて、ばかな顔で、見上げてお酒を飲んでいたいな。(「4月の詩」部分 p70)</p> <p>⑦ 季節が恋人だ、そうつぶやいたとき、急に世界が私の孤独を、宝石に光を反射させるように観察しはじめる。永遠のなか。いくつもの肉体や精神を、私は、私のなかに反射させなきゃ、いけないだろう。(「めざめ」最終連 p82)</p> <p>⑧ 奈落というもの、地獄というもの、言葉というものを信じれば、とにかく底が見えるだろう。永遠に落ちていくことがおそろしくて、大切な想像力を、悪夢のために擦り切らしていった。(「もうおしまい」部分 p86)</p>	
<p>『愛の縫い目はここ』</p> <p>① 曲がり角、もう永遠に会えないつもりできみと挨拶を交わす。さみしさなんてなんてものがある人は、自分の、遠い未来を信じすぎです。(「スクールゾーン」部分 P6)</p> <p>② 死んでしまったきみの魂をつつんで、それから貝のように硬く閉じる。永遠が始まる。(「真珠の詩」部分 P17)</p> <p>③ 永遠にたどり着けないおふとんへ、飛び込んでいくような、</p> <p>④ そういう感覚が死後だろう (「グッドモーニング」部分 P30)</p> <p>⑤ 永遠も一瞬もない時間軸 (「アンチ・アンチバレンタイン」部分 P33)</p> <p>⑥ 「ふれた永遠」(作品タイトル)</p> <p>⑦ なにもかも永遠にあるべきだよ。(「ふれた永遠」部分 P37)</p> <p>⑧ 私には永遠に分らないと思う。(「精霊馬の詩」部分 P65)</p> <p>⑨ 光が反射して、ここまでが現実だと教えられても、その先に行きたがるのが肉体です。きみの名前は知っている、でもきみが私にみせるのはそんなものじゃないだろう。仲良くなろう、どこまでも永遠にわかりあえない、きみのことなど、知りたくもない。(「夢の住人」部分 P68)</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>

一方で、前詩集『空が分裂する』における特徴として挙げた「光輝く」イメージは、この詩集では感じるできない。『愛の縫い目はここ』においてそれが再び大きく姿を現すことを考える時この後退の意味は何か。

それはこの『死んでしまう系のほくらに』が(そして先回りして言えばその次に出される『夜空はいつでも最高密度の青色だ』も同じく)、東京という実在都市で生活する若い女性の心象を主題として書かれているためだと考えることができる。都市の赤いランプの淋しさなどは描かれるものの、宇宙に飛び出した煌びやかなイメージが「永遠」を巡っては皆無に近いことは、まさにこの詩集の主題のあり方からすれば必然に他ならないのである。

- ・とうきょうのまちでは赤色がつらなるだけの夜景がみられるそうです。まだ見／ていないなら夜更かしをして、オフィスの多い港区とかに行ってみてください。／赤い夜景、それは故郷では見られないもの。それを目に焼き付けること、それ／が、きみがもしかしたら東京に、引っ越してきた理由なのかもしれない。(P11「きみはかわいい」最終連)
- ・嫌いという気持ち、とじこめる場所／なんてという叫び、閉じ込める場所／好きだという言葉、閉じ込めた場所／わたしたちにはきつと2つ目の心臓がある／つらいとき、痛いとき、簡単に死んでしまえるような／すぐに生き返れるように／女の子だけの2つ目の心臓 (P39「ブラジャー

の詩」全文)

- ・しあわせそうな犬と、しあわせそうでない犬なんていうのはいるけれど、私達もきっと他人から見るとそうなんだろうね。(P66「わたしのこと」部分)
- ・恋に、最後の希望をかけるような、くだらない女にならないで。(P68「時間旅行」最終行)
- ・母さん、遠くで、小田急線が／ぼくではない誰かをあなたの街へ運びます。／ぼくもあなたも、今日も、孤独です。(P73「線路の詩」最終行)

「とうきょうのまち」「港区」「東京」「小田急線」と実在の地名や固有名詞が並び、舞台が架空の場所ではないことが告げられる。それらの合間を縫うように「嫌い」「つらい」「しあわせ」「ふしあわせ」「恋」といった、感情に関する言葉たちが行き交う。最果タビ第3詩集『死んでしまう系のぼくらに』は、リトルモアという出版社から刊行された。この詩集は少年誌に連載された作品群である『空が分裂する』が直接のターゲットを少年少女の定めているのと対照的に、もう少し年齢の上があった、大学を出て都会で働き始めた女性に狙いを定めたようなところがある。彼女らが読んで心をくすぐられる舞台と題材で満ち溢れている。前作に比して宇宙的な表現が少なく、したがって「永遠」を巡っても光り輝くようなイメージが一旦影を潜めたことは、自然の成り行きであったということができる。これは次の詩集に関してもほぼ同様である。

4 『夜空はいつでも最高密度の青色だ』における「永遠」

第4詩集『夜空はいつでも最高密度の青色だ』は、前作『死んでしまう系のぼくらに』と同じくりトルモアから出されたPOPな装丁の詩集であり、内容面でも前作の延長線上にあるといえる。同じく都会生活の中における女性の生を主題としている。『死んでしまう系のぼくらに』が都会生活からくるところの淋しさや孤独と言ったものをやや感傷的に描いていたのに対し、この詩集には東京に代表される「都会」に対して冷静で批判的な要素が強く感じられる。

都会を好きになった瞬間、自殺したようなものだ。／塗った爪の色を、きみの体の内側に探したってみつきりやしない。／夜空はいつでも最高密度の青空だ。／きみがかわいそうだと思っているきみ自身を、誰も愛さない間、／きみはきっと世界を嫌いでいい。／そしてだからこそ、この星に、恋愛なんてものはない。(「青色の詩」全文)

この詩集は2017年5月に映画化⁵⁾された。その中では看護師と工事作業員の恋という形で具象化されていた。こういった解釈が可能なのは、「街は、人が沈殿してできたものです。」(P22「やぶれかぶれ」部分)や「他人の言葉は決して、私の正解にはならないと知っていて、／ひとり、夜を未読にする。／ふさいだあとの都会から、もれだしたものはなんですか。」(P79「空白の詩」部分)などのように多くの詩篇に渡って、都会生活の雰囲気共通し、その中で悩む心が感じられるからだろう。さらには、前作以上に「ここは渋谷 きみのこと嫌いになってあげようかって言えるくらい／かわいくなきゃ殺される場所 夢の街」(P49「渋谷の詩」部分)、「走り去るのがいいことみたいに思って生きて、若さがちぎれ、有楽町の駅前にぼたぼた、／落ちていった。」(P76「ようこそ」部分)「新宿のみちばたで、たべるドーナッツはいつだって眩しい味。」(P28「新宿東口」部分)のように実在の地名が詩句中に現れる。また、「故郷の夜景が一粒ずつ、ぼくの皮膚から抜けていく。」という印象的な言葉で閉じる「首都高の詩」(P33)というタイトルや「東京と恋愛が、ドミノみたいにばたばたと倒れて、その痕跡／に人生と名付ける方法。もっとましな人生を、手に入れるに／は、もっと不毛な街に旅立つ必要があるんだろう。」(P80「花園」第1連)などの詩句が逆に、恋愛を求めざるを

得ない男女の淋しさに灯を点す。

第4詩集には「永遠」をめぐる「書店で永遠にされた言葉」という注目すべき言葉が登場する。

書店で永遠にされた言葉は、ぼくのなかで循環して、いつのまに／か一瞬で、もろく、古いものになっていた。きみはきみの涙が／ちゃんと腐ることを知っているのか。（「聖者のとなりにはいつも狂者がいる」部分 p42）

書店で言葉が永遠にされる、というイメージはそれほど難解ではない。書籍として印刷され定着すると、原理的にはその言葉は「永遠に残る」からだ。もっともこの引用の中では最果はその程度の「永遠」に対しては信用していないように感じられる。というの「書店で永遠にされた言葉」は「ぼく」の中で「一瞬で、もろく、古いものになって」しまうからだ。この表現は、次の詩集『愛の縫い目はここ』において「光り」のイメージが「私」自身の特性を現すものとして復活し、彼女自身が「聖者」のような位置づけを自身でなそうとしてゆくことから逆照射すると、その前段階として非常に興味深いものであると言える。

また第2詩集『空が分裂する』では頻繁に登場しながら続く第3詩集『死んでしまう系のぼくらに』では「永遠」に絡みつく形では一切影を潜めていた「光輝くイメージ」が、「私」と関わる形で再び詩句の中に登場してくるのも、見落としてはならない重要な事柄である。

季節が恋人だ、そうつぶやいたとき、急に世界が私の孤独を、／宝石に光を反射させるように観察しはじめる。永遠のなか。／いくつもの肉体や精神を、私は、私のなかに反射させなきゃ、／いけないんだろうか。（「めざめ」最終連 p82）

しかし、上の私と光との関わりも、続く第5詩集『愛の縫い目はここ』の中の例えば

からだは巨大な光という機械の、小さな部品でしかありませ／ん。それを動かして、うつくしいものにであうとき、やっと、／私がここにいる理由が生じる。瞳です、光です、私は光。（「しろいろ」最終連 P34）

というような表現と並べるとき、表現の強靱さにおいて比較にならないことがわかる。『愛の縫い目はここ』の中では、私は光の中に位置づけられている⁶⁾のである。

5 『愛の縫い目はここ』における〈永遠〉

『愛の縫い目はここ』には8例（「ふれた永遠」のタイトルをカウントすれば9例）の「永遠」が現れる。最も注目に値するのは「グッドモーニング」に現れる「永遠」である。以下に引用しよう。

グッドモーニング

あなたは若者がきらい、若者はだからいそいで老いていく。／だから、あなたも老いていく。／つきおとされたらきっと、空気抵抗できもちよくなりそう、／気持ちよく空白に飛び込めそうな、／宇宙の果ての崖に立ち尽くしている。／永遠にたどり着けないおふとんへ、飛び込んでいくような、／そういう感覚が死後だろう。

太陽が地球を照らして、夜と朝をつくることは傲慢だと思わないか。／とにかくすべてを照らし

たいから、もう一つの太陽になって、夜空／にのほりたい。滅ぶ生物もいるでしょうね。狂う自転もあるでしょ／うね。それでも私は朝が好き。きらいという感情が、人間の、最も／根源的なものだったらどうしよう。世界を狂わせるのはいつだって、／嫌悪感ですか、憎しみですか。破壊せよ！ばらばらと銃弾が／飛ぶ中で、私はすべての時間を朝にして、草木を枯らして海を枯ら／して、地球が干からびる夢を見ていた。あなたは若者がきらい／私は、あなたたちが好き。
(全文 P30)

注目に値するというのは、ここに例えば「永遠に」のように時間の長さを誇張するという意味での「永遠」ではなく、素朴ではあるが「永遠」のイメージの実質が示されているからだ。疲れた身体を癒やそうと布団に飛び込んで、その形のまま時間が止まる。それが永遠に続きその感覚が「死後」だとする。これまでも『空が分裂する』の中において「死ぬこと」と「永遠」とは強い関わりの中で作品にあらわれていた。しかし明確に「永遠」が「死後」と関わる形で出てくるのは初めてのことである。2番目に出てきている「真珠の詩」についても全く同様のことが指摘し得る。

死んでしまったきみの魂をつつんで、／それから貝のように硬く閉じる。／永遠が始まる。
きみがまばたきのように、毎日一瞬だけ愛したものと共に。(「真珠の詩」部分 p17)

「きみ」の死後、本人が「毎日一瞬だけ愛したものと共に」貝殻が閉じて「永遠」が始まるというのは、ちょうど我々の葬儀において、故人が好んでいたものを棺に入れて死出の旅に添えることと似ている。最果タヒの「永遠」はそこから始まってゆく。

『愛の縫い目はここ』の「永遠」に関してもう1つ注目すべきことは、「永遠」という言葉と関わって「私が照らす」という使命感が描かれていることである。第2連目の冒頭には、「とにかくすべてを照らしたいから」という強い明確な意思が示されている。そして最後は「私は、あなたたちが好き。」と読者のすべてに語りかける。第2詩集『空が分裂する』の中に、「永遠」を巡って「光り輝く」イメージが存在することはすでに検証したところである。しかしそれらは、「私」と直接関わりのない形で現れていた。ちょうど「永遠」を巡って「死」のイメージは頻発していたが明確な「死後」が現れていなかったことと似た関係にある。しかしこの詩集の中においては、「永遠」は明確に「死後」と定義され、「私」は「光の側」に位置づけられようとしている。両者ともにこれまでになかった独特の意味合いを以て「永遠」に関わっている。

筆者は、『最果タヒと「永遠」 — 「光のカリスマ」の誕生』⁷⁾で以下のように書いた。

僕は「詩は個人的な宗教である」と常々考えてきた。詩と宗教の目指しているところは同じであるが、宗教の場合、教祖以外は、教祖の表現に依拠するわけであるから独自性が存在しない。それぞれの詩人は、自ら教祖として自分自身の世界観を体系的に作り上げてゆくのだ。
その点において最果タヒはまさに、精神世界の頂点に立つべく、自らを光の側に置きあらゆる読者を時には突き放し、時には寄り添うという形で自らの言葉を流し込んでゆく教祖であるということができる。「光のカリスマ」の誕生である。

実は「カリスマ」の称号を与えるためには、もうひとつ要素が必要である。最後にこのことについて述べておこう。理論的に考えると、読者に親しみを込めて語り掛ける文体と、読者を唸らせる独自の世界観（しかもそれは形而上の領域であることが望ましい）とが同時に備わっている場合、その詩人は大いなる存在となる可能性を持つ。しかし実際にはなかなかそのような詩人は現れ出ない。例え

ば「きみ」に語り掛ける形の詩集は多いが、それらは形而下の話題に関する励ましであるとか癒しである場合が殆どである。このような場合、人生相談の回答者⁸⁾とはなっても死後世界を含めた世界提示者つまり魂のカリスマとはなり得ない。逆に形而上的世界を色濃く展開する詩人は数多いが、その世界を「きみ」に継続的に語り続ける詩人は多いとは言えない。彼らは孤高の世界に留まり勝ちなのである。

最果タヒは本稿で観てきた通り、宇宙観・世界観に関して大きなスケールと深い切り込みを持つタイプの詩人だと言える。と同時に総じて「きみ」への語りかけという形をとることが多い。この2つの要素が合致した『愛の縫い目はここ』においてついにカリスマの誕生をみたのである。

おわりに

本稿では「光のカリスマ」誕生のプロセスに関して、事例に即しながら詳細に論じた。

最果タヒは30代前半の、これから大きく変化する可能性を秘めた逸材である。ここに論じた詩集群はいわば、最果タヒ初期詩集群にいずれは分類されることになるかもしれない。しかし本稿で見出された視点が今後の彼女の作品を評価する上でも一定の有効性を保つだろうと論者は考えている。

なお、既述通り本稿は拙著『最果タヒと「永遠」―「光のカリスマ」の誕生』⁷⁾と強い相関関係を有する。当該書籍ではスペース的な問題により本稿で述べえなかった細部まで詳細に論じているので参照されたい。

補註

1) 第1詩集『グッドモーニング』に関する拙論

「芸術観光学の理論と実践⁹⁾ 最果タヒと〈場所〉― 後続詩集から第1詩集『グッドモーニング』を逆照射する」(平安女学院大学研究年報17年3月)

2) 全く逆の意味合い

理論的には〈「永遠」という観念語としてではなく、硬い武装を取り去った身近な感覚・実感として語るという意識が平仮名表記を選択させた〉という類の説明も充分にあり得る。

3) 「ぼくらの部屋」

この作品は次のように終わっている。「ぼくは、故郷を捨て、故郷に似た星を、探しに行くんだよ。(ばか／だね。) ゆれて、それは波動のようで、ぼくはだれかとともにいる／心地に、静かで切り抜いた部屋の中でひとり浸っていた。」これを読むと、必ずしも誰かが一緒にいるというわけではなさそうである。けれども、「私」の意識の中では第1詩集のような孤独感は感じられない。

4) 「世界に対するあいまいな定義」

作品「永遠」の中には「いつも、空というものをあいまいに定義して、なんでも空と呼んでいたらいいような気がしているよ、殺人も、恋も、すべて空と呼ばばいいようにおもえていた。また私は幸せになる。」と言う箇所がある。このことについては、本稿に先立つ形で出版されている拙著『最果タヒと永遠』(思潮社)において詳述しているので参照されたい。

5) 映画化

監督・石井裕也。2017年5月13日に東京先行上映、5月27日に全国上映。主演に石橋静河／池松壮亮。東京を舞台とした淡い恋愛映画に仕上げられている。

6) 私は光の側に位置づけられる

この詩集の中では、「私」は「光」の側として描かれる。たとえば以下の例のように。「美しく光っている体が、また目覚めて私になる。」(「12歳の詩」冒頭 P27)「からだは巨大な光という機械の、小さな部品でし

かありません。それを動かして、うつくしいものにであうとき、やっと、私がここにいる理由が生じる。瞳です、光です、私は光。」(「しろいろ」最終連 P34)「死後、名前は溶けて光になるよ。」(「BABY TIME」冒頭 P54)

「だからなにをしても強奪にしかならないのだけれど、／それでも、そのことを認めてしまえる私たちの命の火」(「赤色の詩」P63)「私の体はどこにもなく、貸金庫に預けてきたような気がする。…(略)…透明の声は、必ず光をまといます。肉体につれさられてしまうのはやめて、朝のうちに、光に眼が慣れないうちに、こんにちはと言ってください。あなた、ここは、もっと涼しい場所。」(「自己紹介」最終連 P70)「土の光、水の光、光のない私の体」(「白い花」最終部 P85)「太陽のひかりは柔らかくてつかめないほどの白い糸でできていて、きみが指を動かすだけですうべと、絡まっていくのだ。私ときみはそうして生まれた。」(「無限の魂」部分 P88)

7) 『最果タヒと「永遠」 — 「光のカリスマ」の誕生』

本稿は並行して書かれ近日中に刊行予定の『最果タヒと「永遠」 — 「光のカリスマ」の誕生』(仮題)と関わりが深い、引用文はその後半に収めた『愛の縫い目はここ』に関する論考の最後の部分である。

8) 人生相談の回答者とカリスマとの違い

人生の様々な問題 — 恋愛やその他の人間関係、などについて詩は書かれることが多い。そのため、読者は生きる上でのヒントや励ましや癒やしをその中に求めたりする。詩集の言葉が所謂人生処方箋として作用するのだ。しかし、ある場合に読者は、生活的な問題を越えた形而上的な難問を詩集の中に探そうとする。宇宙とは何か。人間はなぜ生きなければならないのか。死の意味するものは等々。生活記録としての詩集によって答え切れない哲学的問い、形而上的問題に答え得るか否か、それが結局のところ単なる人生相談の回答員か、カリスマ指導者かの決定的な分岐点である。

“Charismatic Poet of the light” A Study on Saihate Tahi Theory and Practice Art Sightseeing Study^⑩

HIRAI, Ken

Upon creating her latest book of verses “The Love Season”, Saihate Tahi achieved a dramatic change. She has turned into a “charismatic poet” with her head surrounded by a halo. It took a long way for her to reach there. There are many images of “light”, in the second book of her verses “the sky is divided”. However, they do not have any influence on the characteristics of “I” in her verses. They drift in the fringe of the word “eternity”. The word “death” often appears in the said book of verses. But they just sound superficial. And the images associated with the words “light” “death” and “eternity” become inconspicuous in the next book of verses “We are in the Death”. These images reappear in “The Night sky always bears the blue tint of the highest-density”, her fourth book of verses. And at last, she has become a “charismatic poet of the light” in her latest book of verses.